

# 北欧精神史におけるキリスト教と土着性

——グリウンベックによるヨーロッパ文化批判——

中里 巧

## 序

本論文の課題は、デンマーク人宗教学者V・グリウンベック Wilhelm Grönbeck (一八七三—一九四八) の思想を通して、北欧精神史における古典的キリスト教文化と土着的文化との葛藤を考察して、その特質を指摘することにある。ここでは、こうした課題を設定する意義ととりわけ北欧精神史の意義について、本論に入るに先立ち前もって簡潔に述べておきたい。北欧精神史という視点は、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてデンマークにおいてC・ローセンベアやV・アナールセンによって大規模に構想され記述が試みられ<sup>1)</sup>、ドイツ語圏ではとりわけ第一次世界大戦期と第二次世界大戦期の狭間において、ドイツ精神史の試みが特有の精神状況のなかでなされていった<sup>2)</sup>。ところで、精神史という方法

は、フランス啓蒙期における人間精神の進化という考え方のうちに出現し、一九世紀ドイツロマン派に継承されて人文諸科学を有機的に総合する学として発展していった<sup>3)</sup>。こうした精神史の潮流は、その手法を著しくそのつど変容させて各時代状況にうまく応じることによって生き残り、様々に分岐しつつ、例えば、ドイツロマン派以後ジンメル・デイルタイ・トレルチを経てマンハイムに及んで現在に至っている。戦後我が国において主としてマンハイムの「層」Scientific概念に触発されて古層論を展開したが、丸山眞男であり、丸山は、記紀神話に表出されている精神性がなお日本の現代社会において古層として現在することを、指摘した<sup>4)</sup>。精神史という視点は、表層的に伝統として受容されて古典的諸文献の固定観念化された諸系列の真偽を、問い返すとともに、高次の教養とは無縁でありながらも人々の生活体験の基層に存する民

俗における意識の深層や思考のかたちを論理的に再構成して、人間精神の営みを総合的に有機的に理解することに、意義がある。こうした精神史という視点からヨーロッパを理解するとき、古代ギリシアやローマの古典的古代から説明を始まる事みに終始する従来の方法は何ら正当性を保持してはいないことが、明白となる。むしろヨーロッパという概念は多義的重層的であり、こうした有機的で錯綜した諸要素をヨーロッパ思想史において取り扱うさいに、北欧という周辺地域から理解することによって、ヨーロッパ精神史における多義性や重層性をより一層鮮明化させることができるということが、とりわけ、北欧精神史の意義である。

#### 一 グリュンベックの主要著作

グリュンベックは、第一次世界大戦後から晩年まで、ヨーロッパ精神史の本質を古典的キリスト教文化と土着文化との葛藤の歴史として捉えるとともに、ヨーロッパ精神の危機を、古典的キリスト教文化における彼岸への志向性および抽象的・観念的なものの絶対的優位性のうちに看取した。こうしたグリュンベックによるヨーロッパ精神の危機をめぐる議論を見るにあたって、そこにいたるまでのグリュンベックの仕事を概観し、人間と自然との有機的一体性を具現していたと彼が考えていた北欧神話世界や原始宗教がどのようなものであったか、確認しておく。

一九〇九―一二年グリュンベックは、『北欧古代の父祖』*Vor*

*Folket i Oldtiden* を発表した<sup>8)</sup>。このなかでグリュンベックは、古代北欧人の生き方の本質をその精神性のうちに見て、「平和」*Fred*・「名譽」*ære*・「幸運」*lykke*・「復讐」*hævn*という言葉をあげて、これらを古代北欧人の精神性における根本概念と考えた。古代北欧人にとって靈魂は周囲世界の自然と不可分離の関係であって、そうした関係のうちに平和・名譽・幸運・復讐という根本概念があらわれる、とグリュンベックは考えたのであった。言い換えれば、人間の靈魂と身体との一体感が、そうした根本概念に反映されている、ということである。こうした不可分離性は、古代北欧人の世界観にも当然のことながら反映していて、神々と人間の住む内界 *Midgardr* と苛酷な自然の形象である巨人族の住む外界 *Vigardr* は、一体であって不可分離の関係にある。北欧神話の独自性は、こうした不可分離の関係が、たんなる調和的關係ではなくて、緊張関係にあるということである。人間の形象である神々と自然の形象である巨人族は、絶えず、反目し争い合っている。しかしながら両者は、つねに相補的でもあって、一方を抜きにして他方のみが存続することはできない。グリュンベックの北欧神話観は、神々も巨人族も万物もともに滅ぶという絶滅思想 *Ragnarök* を、北欧神話の根源的基層として捉えてはいない。グリュンベックによる絶滅思想の捉え方は、エリアーデにおける循環的時間論のようであって、絶滅後の再生を考慮に入れて、絶滅と再生という循環全体を含むものとして北欧神話を理解してい

ると言える。

こうしたグリウンベックによる北歐神話世界解釈は、一九一五年に発表された『原始宗教』 *Primitive Religion* における「原始的」 *primitive* という概念にさらに包摂されていくと思われる。

グリウンベックにおいて「原始的」とは、自然環境と直接に接触する文化という意味である。そして、こうした「原始的」という概念は、「それ自体のうちに絶対的価値を有するものとして認識される文化や宗教」および全体との関連でのみ理解され解釈されるべき人間に対して、適用されるのである。この著作において「原始的」として取り上げられているのは、主として古代インド

＝ヨーロッパ語族の人々であるが、アメリカインディアンや古代ヘブル人もしばしば対象となっており、語族という枠組みが先行する現代的比較神話学的手法とは異なり、あくまでも「原始的」という範疇が先行している。また、全体性や一体性を以てして「原始的」という範疇の徴表として理解しようとするグリウンベックの解釈は、J・グリムにおける神話解釈と酷似<sup>(12)</sup>して、ロマン派的解釈を継承しているのは明らかである。グリウンベックは、「原始的」人々を指して、「自然人」 *det naturlige* と呼んで、そうした人々とヨーロッパ人との間には、深い溝があると言う。しかしながら、ヨーロッパ人と言うばあい、古代北歐人もまたヨーロッパ人であり、だが、古代北歐人は「自然人」として理解されているわけである。この一見矛盾した理解は、ヨー

ロッパにおける北歐の著しい後進性に存していよう。北欧において「古代」あるいは鉄器時代または先史時代が終わるのが、北欧南部のデンマークにおいてさき紀元後一〇五〇年頃であって、そのころようやくキリスト教がはじめて受容されるのであり、南ヨーロッパと比べておよそ七〇〇年遅れているわけである。グリウンベックは、いわば、ヨーロッパ中世になってもなお長く古代として存続した北欧のうちに、ヨーロッパ文化における「原始的」古層を看取している<sup>(14)</sup>のであり、非原始的ヨーロッパなるものとしてキリスト教を理解しているのである。要するに、グリウンベックにしたがえば、ヨーロッパがキリスト教化されることによって、自然との有機的關係が破られていったということなのである。

グリウンベックにおけるいわば北欧に関する古層論とも言えるのが、一九一三年に書かれた『北欧における宗教の移行』 *Religions-skiftet i Norden* という論文であり、北欧におけるキリスト教受容がきわめて政治的表層の出来事に過ぎず、北歐人の意識の深層においてはおそらく現代にいたるまで、キリスト教の形象をもちながらも北歐神話的な精神性が存していることを、主張している。こうした外部はキリスト教であるが内部は北歐神話であるという在り方は、紀元後一〇〇〇年アイスランドにおいて「すべての者がキリスト教徒となり洗礼を受けなければならぬが、私的に古代の神々を崇拜することは差し支えない<sup>(15)</sup>」という決定において、とりわけ象徴的である。この論文においても

興味深いのは、北欧神話の道徳的拘束力の蔽しさよりも、キリスト教における救済の方が古代北欧人にとって真に魅力的であったか否か、という議論であろう。

## 二 グリウンベックによる

### ヨーロッパ文化の危機批判

これ以後、グリウンベックは、一九一四―一九一八年の第一次世界大戦期をくりぬけるなかで、既成の宗教史学という殻を抜けて、ヨーロッパ精神の危機の所在を根本的に解明しようとして、ヨーロッパ精神史の本質とは何であるかを、問いただして行くのであるが、その骨子は、ヨーロッパ文化の深層における原初的宗教性とキリスト教との葛藤のなかで、しだいにキリスト教が優位していったということに存している。このようにヨーロッパ文化の危機を積極的に論じていくのが、一九二二―四〇年に書かれた『一九世紀における宗教思想の潮流』*Religiøse strømninger i det 19. århundrede*・『人間をめぐる闘争』*Kampen om mennesket*・『新しい魂のための闘争』*Kampen for en ny sjæl*という三つの著作である。しかしながら、注意しなければならぬのは、グリウンベックにおける「キリスト教」概念とはそもそも何であるか、ということである。グリウンベックにおける「キリスト教」とは、イエスの教えや教義として語られるキリスト教的理念というよりむしろ、ヨーロッパ文化におけるヘレニズムの

継承者として、あるいは、ヘレニズムという別種の古層を温存していく精神潮流として、考えられているのである。<sup>16)</sup>グリウンベックにとって、两大戦を巻き起こしたばかりか、原子爆弾の製造によってまさに破局的危機を迎えるまでにしたつたヨーロッパ文化の危機の根源は、キリスト教という衣をまとったヘレニズムという古層の作用なのである。グリウンベックにしたがえば、キリスト教における原罪論は、イエスの教えに起因するものではなくて、ヘレニズムによるのである。グリウンベックにとってヘレニズムとは、生き生きとした現実をひたすら捨象化し抽象化して、彼岸を希求することによって、事物と精神との間に無底を形成し、かくしてヨーロッパ精神史の基層に不安という根本気分を定着させた、ヨーロッパ精神史を貫くひとつの強力な意志に他ならない。<sup>17)</sup>このひとつのきわめて頑迷な意志の力が、イエスの教えを変容させて、古層という仕方てキリスト教に深く浸透して、ヨーロッパにおける high culture という役割を演じ続けた結果、ヨーロッパ精神史における真の担い手としての low culture である農民文化との葛藤の果てに、これに勝利して、原初的なものとの徹底した亀裂を生じさせた、とグリウンベックは主張するのである。

しかしながら、グリウンベックの解釈にしたがえば、北欧地域におけるキリスト教の古層は、ヘレニズムというよりむしろ、原初的宗教性としての北欧神話なのであった。この点について、『人間をめぐる闘争』所収の論文「キルケゴールとグレントヴィー」

において、グリウンベックの主張はきわめて明快であって、ヘレニズム的キリスト教の究極としてキルケゴール思想を据えたと同時に、これを超脱するいわば原初的キリスト教、言い換えれば、自然との一体感や有機的統一性を帯びたキリスト教として、グルントヴィ思想を理解しているのである。このようにグリウンベックは、古代北欧への回帰やラディカルな復古主義を、決して主張しているわけではなくて、むしろ、キリスト教における「和解」という理念を積極的に認めて、これを北欧神話における原初的なものと重ねようと試みているように、思われるのである。

以上、グリウンベックによれば、北欧精神史における古典的キリスト教文化と土着的文化との葛藤は、ヨーロッパ精神史における相異なる古層間の争いという特質をもっているということが、明らかなのである。

- (1) *Nordboernes Aandsliv, fra Oldtiden til Vore Dage* bind 1-3, af C. Rosenbergs, Kjøbenhavn, Forlagt af Samfundet til den danske Litteraturs Fremme, 1878-85; *Tider og Typer — af danske Aands Historie* — bind 1-2, af Vilh. Andersen, Kjøbenhavn, Gyldendalske Boghandel og Nordisk Forlag, 1907-09.
- (2) *Die romantische Schule — Ein Beitrag zur Geschichte des deutschen Geistes* —, von Rudolf Haym, Fünfte Auflage, Berlin, Weidmannsche Buchhandlung, 1928.
- (3) S. 207-209 in *Historisches Wörterbuch der Philosophie* Band

3, herausgegeben von Joachim Ritter, Basel/Stuttgart, Schwabe & Co. Basel.

- (4) 『丸山眞男集』全一六巻別巻「岩波書店のうち」第一〇巻三三〇頁以下にマンハイム思想との関係が丸山眞男自身によって回顧されている。また、同巻六一七頁で丸山固有の「古層」概念が定義されている。

(5) 例えば、井上幸治編『民俗の世界史』全二五巻山川出版社のうち、第八巻「ヨーロッパ文化の原型」一九八五年四一〇—四一一頁参照。

- (6) 一九九七年八月レイキャビックにおいてアイスランド国立博物館民俗学課主任ビョルンソン (Arni Björnsson) は、筆者のインタヴューにこたえて、グリウンベックやオルリック (Axel Olrik) による二〇世紀前半の精神史的業績と異なり、戦後は、研究がより実証的に細分化していったため、精神史のような人文諸科学を総合化して何らかの思想にまで昇華する試みとは、馴染みにくい状況である、と語った。

また、一九九六・一九九七年八月レイキャビックにおいてアイスランド文学研究者ブラガソン (Úlfar Bragason in Sigurður Nordal Institute) は、筆者のインタヴューにこたえて、「精神史的アプローチが第二次世界大戦後北欧諸国において退潮した真因は、戦前および戦中ナチズムが精神史的手法を利用して北欧神話をモチーフにしたプロパガンダをおこない成果を上げたため、戦後、ナチズムのイデオログという偏見を受けたりレッテルを貼られることを嫌って、精神史的アプローチそのものが敬遠されたことにある」と語った。

現在、精神史的アプローチは、北欧においては民俗学からの働きかけが主体ではないかと思われる。例えば、『Den Nordiske Verden bind 1-2, redaktion af Kirsten Hastrup, Kjøbenhavn,

Gyldendal, 1991-2.

なお、北歐精神史における「北歐」定義については、現在のアイスランド・スウェーデン・デンマーク・ノルウェー・フィンランド五ヶ国およびグリーンランド(デンマーク領)・フェロー諸島(デンマーク領)・サミー人共同体を包括する地域を指す。スカンディナヴィアと呼ぶ場合は、フィンランド語がスカンディナヴィア語族ではなくウラル=フィン語族に属するため、スカンディナヴィアという言語・民族・地域集団からフィンランドは除外されると考えられるし、同じような理由からサミー人共同体やグリーンランドにおけるイヌイットも除外されよう。グリーンバック思想が示唆する「北歐」とは、スカンディナヴィア地域に限定されている傾向がある。

(7) より厳密に言えば、*Religiøse strømniger i det nittende århundradet* が出版される一九二二年から Hal Koch との共同で編集した雑誌 *Frie Ord* において論文が発表され続けた死の年一九四八年までのことである (Vilhelm Grønbech — *En Bibliografi* — udarbejdet af Poul Holst, København, Povel Branners Forlag; s.9 bind 1 i *Vilh. Grønbechs Kultur Opøvr* bind 1-2, af Ejvind Risgård, København, Gyldendal, 1974.)

(8) *Vor Folkest i Oldtiden* bind 1-4 (b.1. Lykkemand og Niding 1909, b.2 Midgård og Menneskelivet 1912, b.3 Hellighed og Helligdom 1912, b.4 Menneskelivet og Guderne 1912), af Vilhelm Grønbech, København, Forlaget af V. Pios Boghandel.

(9) 絶滅思想を、北歐神話を含むインド=ヨーロッパ語族固有の特徴であり、本質であると理解しているのが、オルリックであるが、こうしたオルリックの解釈は、現在その真偽性はともかくとして、少数派であろう。ノルダルの『巫女子言』研究においても、絶滅思想

を北歐神話の本質とする解釈はみられなく (Ragnarrök — *Die Sagen vom Weltuntergang* —, von Axel Olrik, übertragen von Wilhelm Rainisch, Berlin und Leipzig, Walter de Gruyter, 1922; *Völsung — Gjafir út með Sýringum* —, af Sigurði Norðal, fylgir Árbók Háskóla Íslands 1922-23, Reykjavík, 1923)。

(10) s. 102 i *Religionshistorieren Vilhelm Grønbech*, af J. Prytz-Johansen, København, Gyldendal, 1987.

(11) s. 9 i *Primitive Religion*, af Vilhelm Grønbech, K Hans Reitzel, først som afhandling i *Pokulture etnologiske skrifter*, 1915.

(12) s. 16 i *Nordens Gudeverden*, af Axel Olrik og Hans Ellekilde, København, G.E.C.Gads Forlag, 1926.

(13) s. 33 i *Løjre Forsøgscener - Forsøg med fortiden 1*, af Hans-Ole Hansen, Lejre, Historisk-Arkæologisk Forsøgscener, 1988.

(14) 丸山眞男における「古層」という発想は「すべりオルリックに見えぬ」(s.36 i *Nordens Gudeverden*)。

(15) p. 31f. in *History of Iceland*, by Jón R. Hjálmarsson, Reykjavík, Iceland Review, 1993.

(16) s. 49ff. i bind 1 i *Vilh. Grønbechs Kultur Opøvr* bind 1-2.

(17) *ibid*.

(なかやま・あつこ) 哲学、東洋大学助教授)